

# あいさつことば

□ きまり文句とは言われるけれども

あいさつことばは、なるほどきまり文句でもあるが（と言っても、あいさつことばと非あいさつことばとの境は明確でない）、じっさいには、それが現場でよく生きている。

先日の朝がた、海岸を散歩していたら、知りあいの人が、

「オハヨ アリマス。」（お早うございます。）とあいさつしてくれた。いつになく、この人が、「オハ」を高音に発音したのでおどろいた。しかし、これはこの場での、先方のしつ



藤原与一

くりとしたあいさつ表現であったようである。けさはまた、放送のドイツ語の時間に、ドイツ人の、

「グーテン モーゲン。」

とあいさつするのが聞こえた。聞きなれてはいないイントネーションだったので、私もハッとなった。この人のこの時のあいさつには、かならずや特定の感情がこもっていたのであろう。

あいさつことばは、きまり文句にもなっているとしても、人間によって発言された一つのあいさつことばは、個性化されて、現

場によく生きている。「ボン ジュール。」にしても、人は、心情のままに「ボン ジュール。」などとも言おうのだという。「グッド モーニング。」のあいさつにしても、強調がいろいろにおかれているではないか。

いずれは、ある種別の型（複数）になるのだとしても、その型への持っていくきかたが、あいさつ表現の個別活動である。

「コンチャー。」（こんにちは。）——「チワ」。といったようなものにしても、よく聞いていると、この「きまり文句」が、発言者によって、いろいろ、微妙なものときられてい

る。「はい。」の返事は、応答のあいさつの、もっとも簡単なものであろう。が、たとえば、教室で数十人の人の出席をとってみてもよい。「はい。」が、その人ごとに、一々ちがった音声表現である。感情表現である。「はい。」のあいさつことばが、よくもあしくも、その人その人に生きて輝いている。

あいさつことばは「きまり文句」であつても、それは、どのようにか生かされなくてはすまないものである。

### □べんりなことば

あいさつことばは、きまっているから、べんりなことばである。

このべんりさで、人の社会生活・言語生活は、どれほどらくにされている(救われている)ことか。

### □対話文の基本

対話は、センテンス(あるいはセンテンスの連続体)のなげかけあいである。

考えてみると、あいさつことばは、その対話の出発点によく出てくる。ノーマルな言語

生活はノーマルなあいさつことばからはじめられていよう。

対話の原点に、あいさつことばがある。あいさつことばは、対話文の基本であるとも言うことができよう。——対話でなげかけあうセンテンスの基本的なもの、原型的なものがあいさつことばであろう。

あいさつことばは、言語生活全般のまん中にある、とも言うことができるか。私どもは、あいさつことばの軌道にのって、対話を進行させていく。

もしも社会に、「きまり文句」のあいさつことばがなかったら、と考えてみたい。

### □「あいさつことば」のおくにぶり

現代日本語にも、なんと、あいさつことばが、全国各地に、とりどりにおこなわれていることか。あいさつことばは花ざかりである。

いつの時代にもこうであつたらう。あいさつは、人のまじわり・対話のもつだからである。

ただ、古い時代のことは、ほとんどわから

ない。たとえば、平安時代の民間の女性たちが、「お早うございます。」「今日は。」などをどう言っていたかとなると、私どもは、今、何も知ることができない。

それゆえ、私どもは、今の世代でのあいさつことばを、よくしらべておこななくてはならないわけでもある。

国民の生活史の記述、国の文化史の記述のためにも、私どもには、こうした方面の研究の責務がある。

現在の、国の、あいさつことばの花園を、すこしくかいま見てみよう。

1 結婚披露宴に招かれてのあいさつ——  
京都府丹波西北奥で昭和十年八月に私が聞いたもの

当時の七十七嬢が、私に実演してみせてくれたものである。

「コンニチワ オヒガラニツイテ、オテマ  
ヲ モライナサツテ、ワタシラガ ゴツツ

オーサンニナリマスジャゲナ。」

(後半のアクセントは記載することができなかった。ことばのおわりも、受けとりきることができなかった。)  
「オテマ」は「よめさ

ん」のことで、とあった。

あいさつことばのおくにぶりが明らかである。当時、中国山地方面でも、よく「オテマ」の語が聞かれた。

## 2 晩のあいさつ

出雲地方では、「今晚は。」のあいさつの、

○コンバンモ。

○コンバンモ。

というのが聞かれる。全国でもめずらしいものではないか。考えてみると、「モ」でおわるのも、もっともな言いかたである。村内の人どうしなら、おおよそ毎日、出あつてゐる間からである。特別に「何々は！」というよりも、「今晚モ。」と言つたほうが、親愛感がよく出る。

平凡な晩のあいさつことば、というふうなものではあるが、民衆は、こんなところで、しぜんにおもしろい創作をしている。

## 3 わかれのあいさつ

途上などで、かんとんに「さよなら。」とあいさつすることばに、「アバヨ。」の類がある。これは、東北地方から九州地方にわたつて、国内に広く見いだされる。「アバヨ。」の

語源については諸説があるが、今、私は、「アバ」は「さらば」がもとだと解する。「アバ」に近い「アンバ」があつて、これは九州内で「サンバ。」(さらば。)と並存してゐるからである。

東北地方・関東地方は、「アバ」形のよく見られる所である。「アンバ」も見られる。「アンバ。」もある。

○アンバイ ヨー。

これは、山形県南の駅頭で私が聞いたものである。——老女のこの別辞に対して、孫と見られる人が、「アバ。」と答えていた。

○アバ。アバ。イー。

は、千葉県下の一例である。八丈島には、

○アバ。ヨ。シバ。ヨ。

との言いかたがあるという。——子どものごとばで、かるくわかる時のものとのことである。

中市謙三氏の『野辺地方言集』(藤原注

青森県下のもの)には、「アリガドゴジャリマス」についての、

ありがたう御座りますの訛だが、「さよなら」にあたる、さよならといふ語は普

通民はつかはない。

との説明が見える。

宮城県地方には、日ぐれのわかれのあいさつ、「オ明日。」がある。他家を辞去する時にも言う。佐渡では、かつて聞いたことであるが、子どもたちが、夕ぐれ、わかるる時に、  
アシタ ヤー。

と言いかわしていた。佐渡のこちらの、越後北部では、やはり子どもたちが、夕ぐれのわかれに、  
マンツ。へます。

と言いかわしていた。

わかれのあいさつの特異なものをあげる。

八丈島には、

○オモエ ヨ。へ思えよ。

○オモウ ワ。

がある。これらが「さよなら。」にあたるのは！——そのはずであろう。敦い別辞は、まこと、こういうことばにもなるべきものだったろう。八丈島出身の一人婦は、

「オモウ ワヨ。」は、長い別離にさししての、思いをこめての別辞である。多くは女性の口へのぼされ、ごく親しい

人を送る時に言う。

と、私に教示せられた。

茨城県下では、

○オヒッコミナンシヨ。

との、わかれのあいさつを聞きとめたことがある。野良しごとからの帰途、その人の家の前あたりでこのように言うのだという。

4 ありがとうのあいさつ

「ダンダン。」は、中国地方によく聞かれる

「ありがとう。」である。出雲地方では、

○ダンダンダンダン。

などとも、よく言われている。

「ありがとう。」の「メンタシ」「メンタイ。」

などというのものもある。「めでたし」からのものか。

「サイサイニ。」は、広島市北郊で聞かれるものである。他地方にもあろう。さきの「一段。」に似て、これは、「再々に。」である。

いつもいつもお世話になって、ありがとう、という時に、「サイサイニ。」がつかわれている。

宮古島の、

○タンディガー タンディー。

は、私のもつとも解釈困難とする、感謝あい

さつのことばである。深く感謝する時には、

「タンディガー タンディー。」といったように、

強調の音声表現がなされるのだという。

沖縄本島で聞かれるものには、

○ニフェーデービル。

がある。これも解釈困難のものであるが、人

は、「ニフェー」は「二拝」であるとも説いて

いる。

5 おきのどくとのあいさつ

山形県下でよく聞かれるものには、

○モッケダ ノー。

がある。これがいいいに言われると、

○モッケデ ガンス ノー。

となる。

6 見おくりのあいさつ

北海道では、よく、「気ヲツケテ。」とのあいさつことばが聞かれる。

「オ静カニ。」というの、方々に散在する

ものか。品よくものを言おうとすれば、共通語感覚のもとでも、人はしぜんに、こんなにも

言うのではなからうか。

越後南部で、私自身が受けたあいさつこと

ばには、

○オミチ ヨク。

がある。「一路平安。」へ中国語くや、「ボン

ポヤージュ。」にも似た風趣が、ここにある

う。私には、つゆも忘れることのできないこ

とばである。

□あいさつことばの構造くみだて

1 朝のあいさつのことばについて

鹿児島県下には、

○ハヨ メガ サメヤシタ。

とのあいさつことばがある。「早く目がさめ

なさいました。」と言っている。宮崎県南部

でも、

○ハヨ サメタ ハ。

などが聞かれる。いずれも「早くどうどう。」

と言っていて、あいさつの内容がはなはだ具

体的である。「お早う。」とだけ言うのとはち

がう。

鹿児島県下には、

○ケサ マダッ ゴワシタ。

○ケサ マダッ ゴワシタ。

○ケサ マダッ ゴワシタ。

○ケサ マダッ ゴワシタ。

きょうはまだでござんした。  
などというのも、よくおこなわれている。種  
子ガ島では、

○キユワ マダ| メッカリモーサン。

きょうはまだお目にかかり申さぬ。  
との言いかたもなされている。

こう見てくると、通有の「お早う。」の意  
味とはたらきとがよくわかるう。「お早う。」  
は、つまり、「早くどうどう。」の「早く」を  
独立させたものである。いわば修飾部が、自  
立せしめられることになった。「グッド モ  
ーニング。」には、被修飾の「モーニング」  
がある。「お早う。」には「モーニング」該当  
のものが無い。

2 ありがとうのあいさつについて  
かえりみると、現代日本語での常用のあい  
さつことばには、いわゆる修飾部分を自立さ  
せたようなあいさつことばが多い。

「ありがとう。」のばあいにも、広くおこな  
われている「オーキニ。」がある。「大きにと  
うどう。」という「オーキニ。」であらう。

さきの「ダンダン。」も、修飾用の「段々」  
そのものである。「サンキュー(サンク ユ

ー)。」には、「ユー」がある。人間関係がは  
つきり出ている。

3 わかれのあいさつについて

「アバ。」「アンバ。」「サンバ。」などもそう  
であるが、「サヨナラ。」も、まったく、かぶ  
せことばそのものである。

○左様ならば、これにて御免こうむりま  
す。

などの「左様ならば」が独立した。「ソ  
ナラ。」「フンナラ。」「ソレジャー。」「ジャ  
ー。」みな、ものの言いはじめのことばだけ  
である。

「おさらばで ござる。」などというの  
言いかげことばを、文の、ある完全形式に言  
いさだめようとしたものであらうか。「ジャ  
ーネ。」などというのも、同巧のくふうを  
見せたものと思われる。

4 晩のあいさつについて

「オ晩デス。」というの、実内容そのもの  
を言っていて、「グッド モーニング。」的  
である。中国山地方面の「晩ジマシテ。」も、  
同趣のものである。ところで、「今晩は。」と  
なると、これは、「今日は。」と同様のもので

ある。今晩はどうだというのか、そのへん  
は、なんとも言われていない。ドイツ語な  
ら、「グーテンアーベント。」であるが。

日本語は、一文がつづられる時、「私はど  
うどう。」というのでも、最後までいかに  
と、どうどうするかしないのかわからない。  
私はこれを、日本語表現法の文末決定性と言  
っている。このような習慣の言語なので、日  
本語では、とかく、「今晩は。」式の、あとの  
「どうどう」は言わない言いかたが、なされ  
がちでもあるのか。

### □古風残存と漢語尊重

「サヨナラ。」にしても、「左様なら。」であ  
る。古風である。

小学生たちが、このごろも、朝、学校に出  
かける時、

○行ッテ マイリマス。

とあいさつしている。

老人たちのあいさつことばに、古風な、角  
ばった、あるいはかたくるしいもののあるこ  
とは、多く言うまでもなからう。

あいさつことばには、古風残存の、大きな

流れがある。

これと関連するとも言い得ようか、一方に、漢語尊重の傾向もつよい。「今晚」「今日」も漢語である。「再々」などもそうである。

熊本県下には、感謝のあいさつの、

○チヨージョ アタ。

ありがとうございます、あなた。

がある。「チヨージョー」(重畳、頂上)が見られよう。

四国には、去る人を送ることばに、

○ゴユダンナサイマセ。

へご油断なさいませ。(ごゆっくりなさいませ。)

などがある。(全国方言辞典)

お産のよろこびに行けば、人は、ゴ安産デとあいさつする。法事の家に行けば、人は、今日ワゴ追善デなどとあいさつする。

### □あいさつの心

あいさつには、謙遜の心理がはたらく。重箱にぼた餅を入れて他家へ持って行っても、

タッタ一ツデスガ。

とあいさつする。

かつて、友人のうちに招かれた時、私は、そのごちそうにおどろいたが、友人の父君は、私に、

ホンノダイコナマステ。(ほんの大根なますで。)

とあいさつせられた。

あいさつには、和合の心がはたらく。叱つたり怒つたりしてはあいさつにならない。

人は、しばしば、あいさつとなると、容をあらためる。品を重んじる。みな、和合の心からでもあろう。

上記二項の「あいさつの心」が、あいさつことばの、さまざまの敬語法を生んでいる。鹿児島県下には、そのぬきん出た発達が見られる。敬語接頭辞「オ」の頻用は、全国にいちじるしいものであろう。

あいさつことばに関しては、家庭でのしつけが、古来の伝統であった。言語教育のおもしろい、だじな問題がここにある。